

第6節 まとめと今後の課題

1 平坦部Aの調査成果について

本章では主に平坦部Aの調査成果を総括してきた。まず第1節では、出土遺物に光を照射し、各々の年代観、出土状況等に分析を加え、抽出される特徴・特質を明らかにした。第2節では、本書第3章の調査報告に基づき、平坦部A全体と平坦部A-2（観音堂跡）の成果も加え、プレ等妙寺段階を前Ⅰ期、理玉和尚により開かれた中世等妙寺の開始から、天正16年（1588）の火災により廃絶した後の17世紀初頭前後までをⅠ～Ⅲ期とする4期を設定した。さらに遺構・遺物の年代観から小期区分して利用変遷について整理し、画期とその背景を探った。第3節では、検出された中心的建物跡3棟を取り上げ、建築史的立場から復元される建物とその意義について、三浦正幸氏にまとめていただいた。続く第4節では、等妙寺に伝わる什物について、これまでの調査成果と所見を報告するとともに、寺史への位置づけを試みた。第5節では近年、旧境内の発掘調査と並行して進めてきた奈良山山岳霊場・信仰遺跡の現地調査状況を報告した。

こうした到達点をもとに本節では、現在垣間見えてきた戒場としての等妙寺の姿や、寺院構造について若干の検討を加えた上で、これからの等妙寺研究の課題についてまとめてみたい。

2 『歯長寺縁起』にみる等妙寺の寺容

（1）『歯長寺縁起』について

第2節でも触れているように『歯長寺縁起』は、至徳3年（1386）11月8日、等妙寺末寺であった歯長寺住持の寂証が筆録したもので、等妙寺開創期の様子が詳細に記されており、石野弥栄氏は、「文学的色彩を帯びるが、等妙寺・歯長寺の檀越開田善覚の活動を精細に記しており、史料として信憑性が高い」と評価する〔石野2010〕。近年、山本義孝氏は、『歯長寺縁起』に記された各項目に触れ、「歯長寺は里に設けられた教学中心の道場（教相寺）であり、これに対し奈良山（鬼ヶ城山系）山麓に設けられた戒律道場等妙寺は夏中安居を中心とする修行道場で、加持祈祷を継承する事相寺」として、等妙寺と歯長寺が二寺一具の関係として造営されたものと指摘している〔山本2020〕。つまり、理玉を開祖とする等妙・歯長両寺の伽藍造営を進めた戒家一流の拠点形成の経歴が記されたものといえ、しかもその一翼を担ったのが筆者の寂証であることから、内容は信憑性が高いといえる。

さて、平坦部Aの調査で重要な点は、Ⅰ期（開山期）とする14世紀代の遺構が判明してきたことである。『歯長寺縁起』には当該期の等妙寺仏殿や客殿（方丈）に関する記述が見られるほか、歯長寺の堂舎造営が細かく記されている。これまで歯長寺造営の記述は、等妙寺研究の中でほとんど取り上げられてこなかったが、二寺一具の関係で、しかも両寺の伽藍造営が同時に行われている過程を見ると、戒家にとって必要な堂舎整備は、等妙寺においても当然ながらなされた可能性が高い。そこで、五葉道全氏の解説書〔五葉2002〕をもとに、『歯長寺縁起』の記述から関連する項目をピックアップし、現地との比較を行ってみたい。

（2）等妙寺の堂舎に関する記述と現地の比較

①第一章「二 開田善覚禅門の発心」

元徳2年（1331）秋に開田善覚が立間大光寺で理玉に会い、そこで帰依した経緯が記され、仏殿建

立のために料足百石を寄進している。同年等妙寺造営に嚴重な沙汰があり、10月18日に「庫裏方丈造営」とある。この記述が正しければ、等妙寺では庫裏・客殿（方丈）がまず完成し、その後、仏殿が建てられたことになる。

②第四章「九 開山遷化」

「十余間客殿」、「行道自客殿至釣殿折出、摸大衆影於水中」とある。「開山忌十二日毎月経営、一寺大事道俗奔走。」とあり、開山忌は本寺である等妙寺で執行された可能性があろう。そうすると、釣殿を備えた十余間の客殿があったことを示している。

③第五章「二 僧堂・土地堂・祖師堂」

ここでは土地堂及び祖師堂に関する記事を見る。土地堂は、「見土地堂、山王垂跡尊体末社天神御影並床、誠国利民済生利物本尊也」とあり、比叡山の守護神、日吉山王権現を祀った堂である。祖師堂は、「見祖師堂、南岳天台伝教慈覚御影歴々。」とあり、南岳、天台、伝教、慈覚は、「南岳大師」、「天台大師（智顗）」、「伝教大師（最澄）」、「慈覚大師（円仁）」のことである。戒家の法儀である戒灌頂の祖師壇に掲げられる軸とほぼ同じであることが判る。

④第五章「四 寺家の綺羅」

「阿々殖一木立一石、…可見愚老泉水」と、寂証自らが作庭した泉水に関する記述がある。「一石を立てる」というのは、Ⅲ区庭園地区で立石が多用されており、大変気になる表現である。

以上のことを踏まえて、平坦部Aの遺構について再度確認してみたい。

まず、①は、沙汰を下した主体は判然としないが、理玉が奈良山で籠山行を開始して11年目に庫裏・方丈の造営が成ったということを示す。②では、泉水を伴う庭を備えた客殿（方丈）の造営とみられる。この記事は平坦部Aに該当するものであろう。Ⅰ期の敷地造成は、Ⅲ区庭園地区の報告で明らかのように、谷川を制御するために堤状遺構を築き、谷川を付け替えて石積みSW003を配した造成を行い、滝SX02や池SG01南北の堤である土手状遺構を敷設する、かなり大がかりな造成工事が行われている。土手状遺構の幅は7尺（210cm）前後と、旧本堂SB01犬走りの幅とほぼ同じで、直線的に配置されるあり方は、池堤体としての機能よりも、建物との関連性を窺わせる。③の「土地堂」の日吉山王神は平坦部A-1（山王跡）が該当する。「祖師堂」は、建物跡SB05の可能性が高い。報告にあるように、周囲が塀に囲まれた空間に置かれ、基壇の石積みには池状遺構SX01などに見る立石で飾られており、特別な造りとなっている。おそらく、理玉遷化の際には天台歴代と合わせて、祖師堂に祀られたと考えられるが、そうすると②で示される情景は、まさしくⅢ区庭園地区で想定される場を示している可能性が高い。毎月12日の理玉忌の法要は、等妙寺のまさにこの場で行われていたものと理解したい。

さて、『齒長寺縁起』の重要な点は、第四章「等妙寺開山受法」などに、当時の戒家の歴史的な動向や思想が盛り込まれていることで、先の①の記事は、法勝寺流の戒場として授戒道場を置く客殿（方丈）の造営を重視する姿勢から、客殿（方丈）の完成が優先された可能性がある。それと同様に、戒灌頂を執行するにあたって重要なのが「水」で、儀式の前にまず行われるのが「取水」である。受者は、羯磨師を指導師として、深夜に定められた取水場にて「取水」し、五瓶灌頂、正灌頂などの戒儀に用いられるという〔色井1989〕。取水される水は、清水でなければならず、現在、重授戒灌頂を執行する西教寺（滋賀県）では、客殿庭園の池奥にある湧水点に設置された取水場にて行われている（写真3-35）。

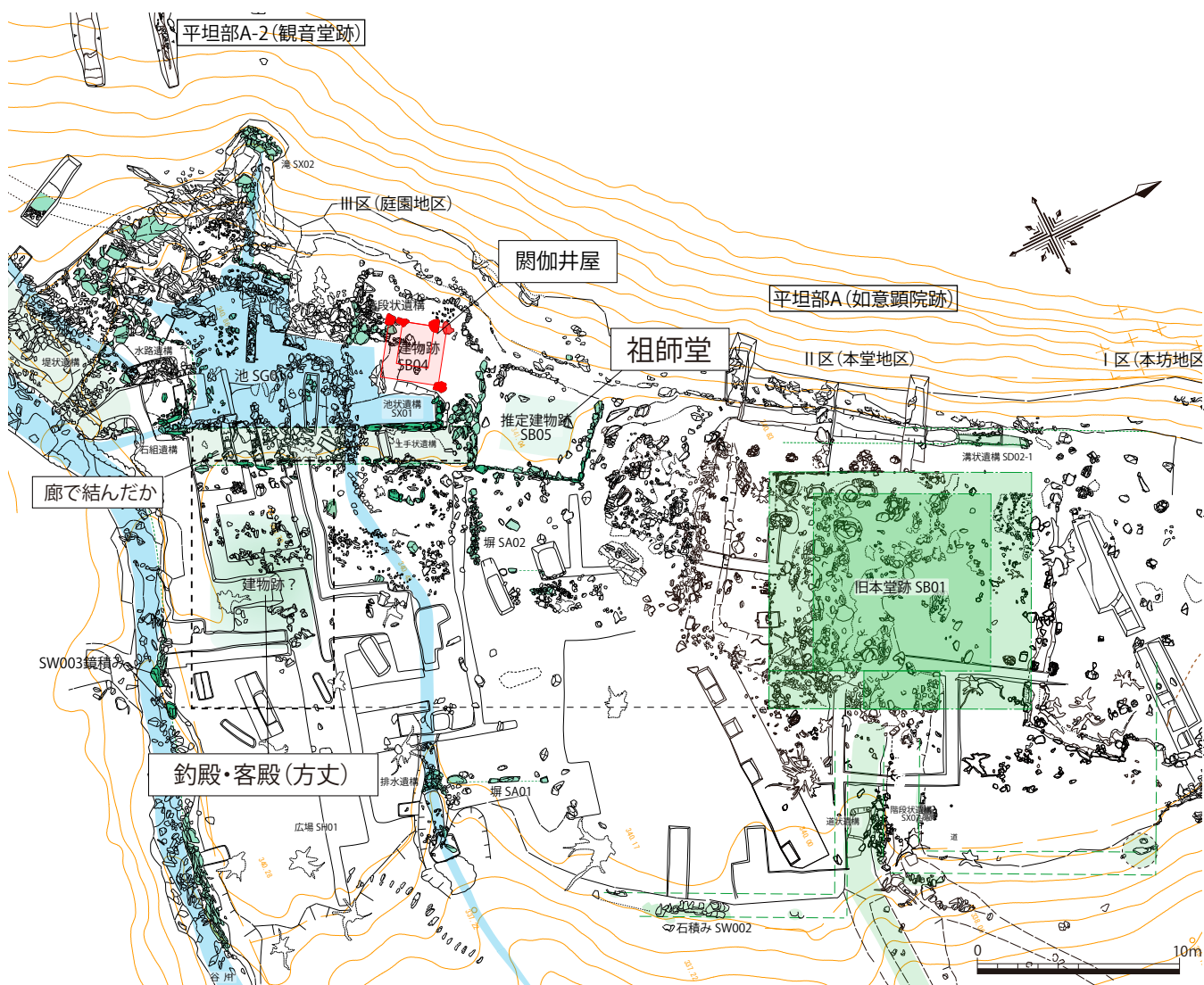


図 3-62 I 期（開山期）の推定客殿・祖師堂の位置

ここで今一度、平坦部AⅢ区庭園地区で確認すると、Ⅱ期の建物として一間四方のSB04がある。池に併設されており、関伽井屋の可能性が高いと考えられる。重要なのは、SB04南脇の階段状遺構で、池の中へと下りられる構造となっている。この遺構は、Ⅰ期・開山期の作庭当初に構築されたとみられ、周辺もSB04以外の改修の形跡は認められない。したがって、Ⅰ期にもSB04と同規模の関伽井屋が存在し、Ⅱ期に至って建て替えられた可能性が高い。このように、池の構造自体も儀式執行の場であることが深く関係していることが窺われるのである。

また、作庭・築堤などの土木技術について、井原今朝男氏がその著書の中で、「弁財天の秘法」とされた土木技術が、弁財天や八大龍王を祀る新しい仏教法会の呪術とともに、光宗の『溪嵐拾葉集』によって全国に広められたとし、「弁財天の秘法・八大龍王の祈祷は、中国以来の灌漑技術革新の導入をむしろ推進する役割」をもっており、「その開発技術と呪術とが一体になって、聖と呼ばれ



写真 3-35 西教寺客殿庭園脇の取水場

る中世僧侶によって築堤開発が主導された」とされている〔井原 2017〕。

光宗は理玉の師であり、元応2年（1320）の夏、等妙寺開山に立ち会ったのも光宗である〔田中 2003・石野 2005b〕。『溪嵐拾葉集』には様々な内容が記されており、等妙寺の造営にあたってもこれに記された知識が反映されている可能性は高いだろう。それらすべて理解し、読み解くことは困難であるが、学際的な研究を通じて少しずつ紐解いていく必要がある。

次に、等妙寺造営に関して、戒家の思想が反映されたことを示す記述が『等妙寺縁起』にあるので見ていきたい。

3 戒家の思想と『等妙寺縁起』について

（1）天台の戒律復興と戒家の思想

黒谷流戒家の思想は、天台宗の開祖最澄（767～822）が創始した大乘戒（円戒・円頓戒）を復興しようとするもので、その思想を体系的にまとめた伝信和尚興円、その弟子の恵鎮、光宗らによって法勝・元応寺を中心に多くの門下生・檀徒が集まり、後醍醐天皇の後ろ盾を得た恵鎮によって全国へと広められた。天台宗は創始以来、円（法華）・密（真言）・禅・戒の四宗兼学を特色とするが、戒家では、戒学を根幹に据え、それらを融合させた「四宗融合」を本義とし、修行の実践と戒律護持を誓う「授戒」を特に重視した〔寺井 2016〕。

それでは、実際に修行の実践場所がどのような場所とされ、戒場として定められるにはどんな条件があったのだろうか。戒家の思想に「七重結界法」というものがある。寺井良宣氏によれば、「結界とは、修行地を浄域として区切ること」で、「一般には修行地の四至（四方）を俗世間から区別して境界を設ける。比叡山では山上の修行地を麓の街と区別し、しかも覺りの低位から高位への段階である六即位を当てはめて六重に結界を設けた。戒家では、さらに戒壇院を六重の中心部に位置づけ、これを第七重と見て七重結界を立てた。」という。さらに、「戒家では、中心部の戒壇を「心性中台の常寂光土」とし、そこを「一心戒蔵」とした。つまり、戒壇は最高の聖域であり、また翻って、人の心の中にも清らかな仏性があり、戒を学ぶことによってそれが開発されるとみる、天台本覚思想による考え方がある。」とされている〔寺井 2018〕。「常寂光土」とは、浄土、つまりは仏の世界とされ、天台大師智顗（538～597）が仏国土を凡聖同居土・方便有余土・実報無障礙土・常寂光土の四土に分類したことに基づく思想で、「四土結界」や「四種仏土」と呼ばれるものである。それをさらに「心性中台」とするから、戒家がいかに授戒の場である戒壇を重視していたかが窺われる。



（2）『等妙寺縁起』に見る結界設定と聖域構造

近世初期成立とされる『等妙寺縁起』は、文化元年（1804）、昭和3年（1928）の2本が東京大学史料編纂所に架蔵されてい

図 3-63 戒家の七重結界概念図
〔寺井 2016〕より引用・一部改変

必可有圓頓戒修行言說而進貴賤按武畢
是則出世初也善覺禪門阿堵五十貫奉
進之則如意輪堂為造宮次北山西園寺
大綱言宜房卿此由聞天下喜國幸也山中
造營節西園寺家衆各致勢力也就中伊
豆刹十波堂盡粉骨已既佛閣庫院七雲
造宮成訖畢夫以者介土四種佛土為山之至
結界夫四種者從下橋至中橋同居妙土方便
是則下品寂光淨土初門也次從中橋至上橋
者實報淨土是即中品寂光淨土也復從
上橋至本堂為常寂光淨土是則上品生
淨土也次七重結界者理即名字觀行相似
介已與究竟中臺是也則七難即滅七福即生
山移北嶽山規戒也故七重結界山下奉崇十

図 3-64 『奈良山等妙寺縁起』
文化元年書写本抜粋
(東京大学史料編纂所蔵)

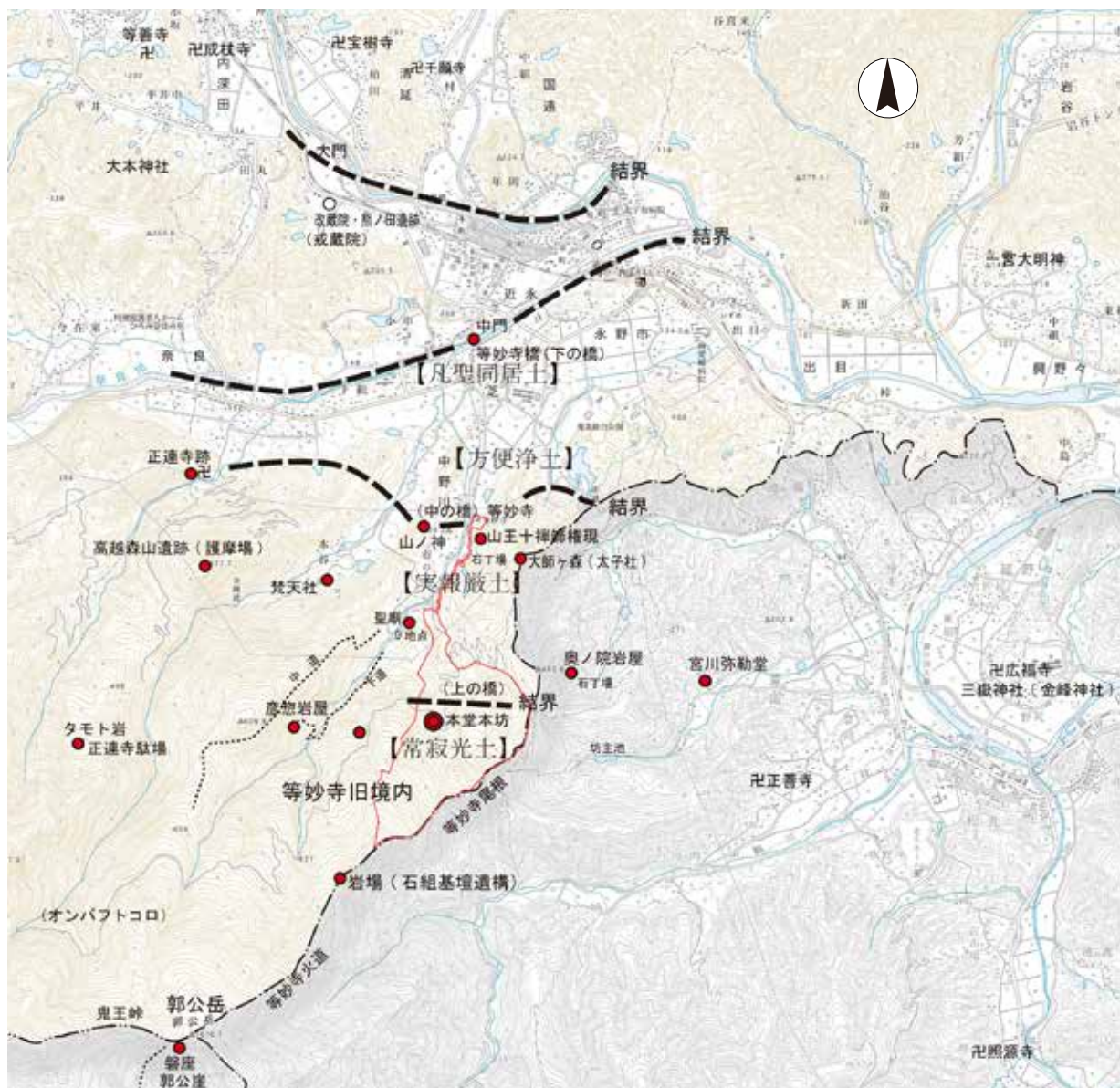


図 3-65 周辺の関連地と四土結界

る。このうち、文化元年本に「四種仏土」「七重結界」の記述が見られる。昭和3年本では「七重結界」が欠落し、叡山の規式「六即結界」のみとなっている。

文化元年本の記述では、「土を分て四種の仏土に為し、山を七重の結界とす。夫れ四種とは下橋より中橋に至りては同居妙土（有余土）方便とす。是則ち、下品寂光浄土初門なり。次、中橋より上橋に至りては実報浄土。是則ち、中品寂光浄土なり。また、上橋より本堂に至るを常寂光の浄土とす。是則ち、上品上生浄土なり。次、七重の結界は、理即名字觀行相似分真究竟中台、是なり。則ち、七難即滅七福即生の山、比叡山の規式を移し、故に七重結界なり。」とある。また、続けて山下・山上の施設についても記述があり、「山の下に十禅師権現を崇め奉る、本地延命地藏菩薩内證將軍尊なり。且は曾我兄弟の修羅の苦を除んが為、また、有情非情の貴賤、此の山に運歩を成す者、不浄を除いて、潔と成さんが為なり。山上に山王七社を勧請奉り、鎮守と為す。故に此の山に登る輩は、四土一念に極め、六即不二の成仏、刹那に唱える者なり。」とある。この記述を現地と照合すると、図3-65のようになる。

さて、四土結界思想については、九州福岡・大分県境にある修験霊山英彦山での研究が知られており、霊山・霊場には浄域を護持するためにこうした結界設定がなされている〔長野1987・山本2003〕。山本義孝氏によれば、結界を区切り繋ぐものとして一般には鳥居がその役割を担うが、「橋」を用いるのが等妙寺の特徴であるという〔山本2016〕。『等妙寺縁起』に記された下橋は、奈良川に架かる等妙寺橋の付近が該当し、中橋より上橋までは「実報浄土」で菩薩界に例えられ、修行専念の空間とされる。また、上橋から本堂までを常寂光土と位置づけ、七重結界については七重目を「中台」、つまり「心性中台の常寂光土」として、中心部の戒壇を位置づけていることが判る。

十禅師権現については、第4節にて紹介したとおり、貞治6年（1367）銘が記された木造僧形神坐像の発見により、現等妙寺の境内に隣接する日吉神社の前身が十禅師宮であったことが判明した。このことは、山上と山下を結界する中橋が、現在の等妙寺付近が該当することの証左でもあり、かつて霊光庵のあった場所である。遷宮が貞治6年（1367）であることから、理玉の遷化からおおよそ10年後、山下の施設整備がようやく整ったことを示すものと推測される。

十禅師権現について、船田淳一氏の研究によれば、戒家はその思想において、山王の諸尊は十禅師神に集約され、日本国中の神祇すべての神を内包する絶対的な神格と位置づけた。中世の十禅師神は、崇り神として特に恐れられ、衆生の造悪に対して「怒る神」として悪人を罰する「閻魔大王」同体説によって賞罰機能を及ぼすことで、戒律の実効性を高めたとされている〔船田2009〕。山本義孝氏は、戒家による授戒儀礼にあたり、その空間には山王神が祀られるが、円頓戒の授戒によって人間の身体が神祇で満たされると観念する。このように神祇を重んじる背景には、神祇の機能が「悪を遮り善を持する戒律の機能そのもの」と理解されていたからであった、とされている〔山本2020〕。

『等妙寺縁起』には十禅師宮を置いた理由として、貴賤を問わず、不浄を除いて潔とすること、とある。つまりは、山に入るためには身を浄める「禊」が必要とされた。さらに一步進めて考えるならば、貴賤を問わず一般に対する結縁授戒は、ここで行われたのではないだろうか。このように見れば、霊光庵が里と山とを繋ぐ施設として重要な役割を担っていたと考えられる。

十禅師宮推定地の直上には、第5節にて紹介した大師ヶ森（太子ヶ森）があり、ここは市越街道から等妙寺尾根を通して山頂まで続く、かつての行道（修行路）とも見られ、その基点ともなる。この周辺は現在調査を進めているが、今後解明していくべき重要な地区として認識できる。

以上のように、『等妙寺縁起』は近世初期成立であるが、戒家の思想に基づく結界設定は、寺院構造において確かに反映されていることが判った。中心部の戒壇を最高の聖域とする「七重結界法」が敷かれ、灌頂執行の場である本坊客殿は戒壇院として位置づけられた特別な場であった。また、山下の施設として十禅師権現宮及び霊光庵については、南北朝期に十禅師神の遷宮によって、整備が完了した可能性にも言及した。こうした寺院造営の動向からは、まさに比叡山に匹敵する修行地を目指し、造り込まれていく姿を彷彿とさせる。本寺法勝寺の衰微に伴い、法勝寺流の復興といった部分において等妙寺が担う役割もまた大きくなっていったのではないだろうか。

4 等妙寺研究のこれからの課題

平坦部Aの調査により、戒場としての姿の一端が判明したことは大きな成果であるが、同時に課題として見えてきた部分も少なくない。

第1には、前I期とする等妙寺前史の存在が明らかになったことである。しかも、第5章の久保論文でも明らかなように、二臂如意輪観音を祀る観音霊場として既に開かれていた可能性が示唆される。当地域での古代から平安・鎌倉時代の歴史的動向については未だはっきりとしておらず、今後の解明が期待されるところであり、同時にそれは奈良山の霊場としての形成過程を明らかにしていくことにも繋がる。第5節で指摘するように、山岳霊場・信仰遺跡の存在が見込まれる広大な山は、行政区を複数跨る領域であり、その実態追及には近隣市町と連携し、地道に調査継続していく必要がある。また、それは考古の分野だけでは解決しない問題が多く含まれており、宗教学・仏教史学・仏教美術・文献史学など、学際的研究により進めていく必要があり、今後の大きな課題といえよう。

第2には、等妙寺の僧組織、一山組織についてである。中世史学の黒田俊雄氏による顕密体制論は、権門寺院の僧侶集団組織が学侶方（教学）・行人方（寺務）・聖方（上人）という階層性を持つことが明らかにされたが、等妙寺の場合も当然ながら戒家の律僧のみで活動が成り立っていたわけではない。「十二年籠山行」や「山中修行」を行うにあたって、修行中は生産活動が全くできないため、それを支える行人方や寺院経営の上での聖方に属する半僧半俗の人々が大勢いたというのが実際であろう。第5節で山中修行の担い手（修行者）として想定する「宗教者を含んだ半僧半俗の民」とは、いわば檀徒として地元に住む人々を指している。寺院組織の下部構成員として、等妙寺の経営や維持管理を担い、律僧らの修行を支えた。それだけでなく、山での生産活動に従事し、修験活動をも行っていたことが想像されるのである。特に、井原今朝男氏の著書では、院政期に行人方が修験活動を展開したことや修験道で修行した山岳寺社の聖人・行人が授戒会や戒律復興に密接に関係していることが明らかにされてきた、近年の中世史学の動向に注目されている〔井原 2017〕。

こうした僧侶集団の階層性といった点では、等妙寺の寺院構造上に全く表れていないわけではない。中心域の構造は、谷川を結界として4つの地区があり、このうち北地区の福寿院跡は、先述した『等妙寺縁起』にみる上橋より下位に位置しており、下部構成員である聖らの拠点ではないかと想定されるエリアである。また、山岳修行との関わりが深いのは、中央地区の子院群で、雁木遺構と呼ぶ石階段を通して山岳へと道が繋がっている。峰入りのための道であり、「山中修行」の拠点と考えられる。こうした各地区の発掘調査が進めば、自ずと等妙寺内部の組織のあり方が見えてくるであろう。中心域の内部の調査も継続的に実施していかなければならない。

第3には、比叡山も含めて霊山・霊場との比較研究に取り組んでいくことが挙げられる。等妙寺では戒家により比叡山に匹敵する修行地を目指した造営がなされたと考えられるが、叡山では三塔十六

谷とされる谷組織が知られている。また、等妙寺の六奉行寺院について山本義孝氏は、大和国の大寺である興福寺に見られる六方衆や九州最大霊場の彦山で知られている彦山六峰の事例から、「宇和荘の地域開発を進める各拠点であると同時に、奈良山での山中修行を支え、参籠拠点である等妙寺を運用し、管理維持する仲間集団」として位置づけられている〔山本 2020〕。広福寺（松野町延野々）や齒長寺（西予市宇和）においても等妙寺開創以前の前史が明らかで、六観音に擬えて六奉行とされたことを考えると、理玉らによる等妙寺開創以前から地域内での紐帯そのものは形成されていた可能性が考えられる。宇和荘全体での宗教的動向について、今後さらに探っていく必要がある。

以上のように、等妙寺の調査研究課題は枚挙にいとまがない。一つの分野だけでは到底理解できない面も多々あるため、地道な基礎調査の蓄積に加え、分野や地域を横断した、総合的な調査研究が求められている。今日まで紡がれてきた、また今後明らかになってくるであろう地域の歴史を、将来にわたって継承し、史跡として大切に護り伝えていくため、これからも研鑽に努めていかねばならない。

【参考・引用文献】

- 石野弥栄 2004 「「齒長寺縁起」の世界－南予中世社会の一断面－」『伊予史談』第 330 号 伊予史談会
- 石野弥栄 2005b 「第 2 章 歴史的環境」『等妙寺跡（第 2～6 次調査）』第 7 集 鬼北町教育委員会
- 石野弥栄 2010 「付編 等妙寺関係主要文献史料解説」『史跡等妙寺旧境内保存管理計画策定報告書』鬼北町教育委員会
- 石野弥栄 2011 「伊予等妙寺の縁起と説話」『一遍会報』第 340 号
- 井原今朝男 2013 『史実中世仏教 第 2 巻』興山舎
- 井原今朝男 2017 『史実中世仏教 第 3 巻』興山舎
- 五葉道全 2002 『齒長寺縁起－建武の中興の武士たち－』文芸社ライブラリー
- 色井秀譲 1989 『戒灌頂の入門的研究』東方出版
- 田中貴子 2003 『『溪嵐拾葉集』の世界』名古屋大学出版会
- 寺井良宣 2016 『天台円頓戒思想の成立と展開』法蔵館
- 寺井良宣 2018 「天台の戒律復興と等妙寺－円頓戒思想による戒律と修行－」『等妙寺旧境内国指定史跡 10 周年記念シンポジウム－中世等妙寺の具体像に迫る』鬼北町教育委員会
- 長野 寛 1989 「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持（Ⅰ）」『駒沢地理』第 25 号 駒澤大学地理学教室
- 船田淳一 2009 「中世叡山律僧の神祇信仰について－本覚思想との関係から－」『日本思想史学』41 号
- 山本義孝 2003 「彦山における中世墓の展開」『山岳信仰と考古学』同成社
- 山本義孝 2016 『「奈良山」の構造と世界観を読み解く』鬼北町教育委員会
- 山本義孝 2020a 「山岳霊場奈良山の世界観を探る」『等妙寺開基 700 年記念講演会資料パンフレット』鬼北町教育委員会
- 山本義孝 2020b 「山王神道と戒家の十禅師信仰」『講演会&等妙寺ウォーキング資料』鬼北町教育委員会
- 山本義孝 2020c 「山寺研究から霊場研究へ」『山岳信仰と考古学Ⅲ』同成社